

マルコによる福音書15章1-41節 「十字架の苦しみ」

1A 十字架の判決 1-20

1B 尋問に答えないイエス 1-5

2B 暴徒を選ぶ群衆 6-15

3B からかいを受けるイエス 16-20

2A 十字架刑の執行 21-41

1B 十字架への道 21-24

2B 罪に定められたイエス 25-32

3B 神から見捨てられたイエス 33-37

4B 死なれた後の徴 38-41

本文

マルコによる福音書 15 章をひらいてください。私たちはついに、イエス様が十字架刑の判決を受け、それから処刑される場面を見て行きます。

1A 十字架の判決 1-20

1B 尋問に答えないイエス 1-5

1 夜が明けるとすぐに、祭司長たちは、長老たちや律法学者たちと最高法院全体で協議を行ってから、イエスを縛って連れ出し、ピラトに引き渡した。2 ピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」3 そこで祭司長たちは、多くのことでイエスを訴えた。4 ピラトは再びイエスに尋ねた。「何も答えないのか。見なさい。彼らはあんなにまであなたを訴えているが。」5 しかし、イエスはもはや何も答えようとされなかった。それにはピラトも驚いた。

場面ががらっと変わりました。イエス様は、夜に、イスカリオテ・ユダの裏切りによって捕らえられ、それから大祭司カヤパの邸宅で、死刑の判決を受けました。けれども、当時、ユダヤ人たちには死刑を執行する権限が剥奪されていました。彼らには死刑の方法として、石打ちがあります。けれども、ローマ帝国はユダヤ人に主権を持たせないために、死刑に処する権限を剥奪していたのです。それで、彼らはイエスを死刑にするために、当時のユダヤ属州の総督ピラトのところへ訴えに来たのです。夜が明けると、形式的にサンヘドリンにて協議を行って改めてイエスを死刑にする決議を出した後に、それからピラトのところへ連れて来たのです。

ユダヤ人の間では、イエス様が「いと高き方の子キリスト」であると公言したことによって、神を冒涜しているということで死刑に決めました。けれども、異教の国ローマにとっては、そんなことはユダヤ人の宗教のことであり、自分たちには全く関係のないことです。それで、イエスが「ユダヤ人の

王]であると言っているとして訴えました。ローマにとって、反逆罪が最も重い罪でした。皇帝カエサルのみが王であるのに、自分たちに王がいるとなれば反逆罪で訴えることができます。

それでピラトが、「あなたはユダヤ人の王なのか。」と尋ねていますが、イエス様は、「あなたがそう言っています。」とのみ答えておられます。「その通りです」とは答えておられません。なぜなら、確かにユダヤ人の王としてこの世に来られたのですが、ピラトの意味しているような政治的な王ではないからです。ヨハネの福音書には、イエス様がピラトにこう答えられている言葉があります。「ヨハ 18:36 わたしの国はこの世のものではありません。もしこの世のものであったら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」

ピラトも、これはローマが重大な問題とする反逆を先導するような人物ではない、とすぐに見分けたのでしょう。しかし祭司長らが食い下がって、訴えています。ここでピラトが驚いたのは、イエス様が何も答えようとされないことです。ピラトが総督であった時に、ユダヤ人たちとの仲は最悪でした。ピラトは、ユダヤ人を嫌い、ローマの異教のものをエルサレムに持ってきたりして強い反感をユダヤ人から受けています。ルカ 13 章には、「ガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた」と書いてあります(1 節)。ユダヤ人の熱心党员らが、ユダヤ人の王メシアの到来のために、自らが立ち上がって武装して暴動をあちらこちらで起こしていました。ですから、こんなに何も言わないイエスを見て、ピラトは本当に驚いていたのです。

思い出せますか、マルコによる福音書には、イエス様が悪霊を追い出すなど奇跡を行われた時に、群衆が、その権威の大きさに驚いていましたね。イエス様についての驚きが、ここでも続いているのです。何が驚きなのか？イザヤが預言した通りですが、「53:7 屠り場に引かれていく羊のように、手を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」であります。イエス様は、「I ペテ 2:24 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。」のです。語ることをせず、かえって口を開かないことによって、ピラトに対して証しを立てておられました。私たちも必ずしも、口を開くことだけが証しではなく、時に愛をもって忍耐をし、口を開かないところにキリストの証しが表れていることがあります。

2B 暴徒を選ぶ群衆 6-15

6 ところで、ピラトは祭りのたびに、人々の願う囚人一人を釈放していた。7 そこに、バラバという者がいて、暴動で人殺しをした暴徒たちとともに牢につながれていた。8 群衆が上って来て、いつものようにしてもらうことを、ピラトに要求し始めた。9 そこでピラトは彼らに答えた。「おまえたちはユダヤ人の王を釈放してほしいのか。」10 ピラトは、祭司長たちがねたみからイエスを引き渡したことを、知っていたのである。

ピラトは、イエス様にはローマ法に触れるような罪はないと判断していました。彼にとって、その

まま無罪にすることが、裁判官としての良心にかなったものでした。ところが、彼は政治的に動いています。まず、祭司長たちはユダヤ人を代表していると同時に、ローマに対しても発言権をある程度持っています。彼らを怒らせれば、きちんとユダヤ人を治めていないということがローマ皇帝に告げ口される可能性もあります。そこで、ユダヤ人の民衆を満足させることにしたのです。彼らにとって暴動を起こしていたバラバという男は、一般民衆にとっても嫌な存在だったはずだからです。そしてユダヤ人の王として祭り上げられるほどのイエスであれば、彼とバラバを比べれば、当然ながらイエスを選ぶだろうと思ったのです。ここで、過越の祭りなど、ユダヤ人の祭りの時に彼らを満足させるために囚人を釈放させるのを常としていましたので、この機を掴んで、民衆によって選ばせて、祭司長たちの訴えを退けようとしたのです。

ここに二つの罪があります。一つは、宗教者らの妬みの罪です。妬みとは、誰かが尊ばれる時、怒ったり、憎んだり、あるいは悲しんだりする感情です。私たちは、前回、十字架に至る罪はどこから始まったのかを見ました。宗教指導者らがいて、そして十二弟子の一人が裏切り、他の十一人が見捨てて行ったところから始まったところを見ました。罪とは、遠くにいる誰が見ても極悪の人たちによってもたらされるものではなく、実は自分の中に、自分たちの周りに、身近なところから出て来るものだということです。妬みというのは、あまりにもかけ離れていれば、起こらない感情です。年収が一億円の人に私たちは妬みませんが、自分よりも一万円、給料をもらっている人には妬みやすいものです。ですから、身近なところから出て来ます。

そしてもう一つの罪は、「打算」あるいは「妥協」と言ったらよいでしょう。政治家がしばしば犯す罪ですが、全ての人間が持っている罪です。ヤコブが手紙の中で、「4:17 こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。」とあります。正しさの中で行動すべきなのに、周りからの圧力があります。それで、人々を満足させようと思って、正しくないと分かっているのに、それを選び取ってしまう罪です。社会の中で起こっている虐めというのは、大体、「見て見ぬふり」をして起こる現象ですね。

11 しかし、祭司長たちは、むしろ、バラバを釈放してもらうように群衆を扇動した。12 そこで、ピラトは再び答えた。「では、おまえたちがユダヤ人の王と呼ぶあの人を、私にどうしてほしいのか。」13 すると彼らはまたも叫んだ。「十字架につけろ。」14 ピラトは彼らに言った。「あの人が多様な悪いことをしたのか。」しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。「十字架につけろ。」15 それで、ピラトは群衆を満足させようと思い、バラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡した。

悲劇が起きました。暴動の罪を犯した者が釈放され、全く罪を犯していない者が十字架刑の処せられました。しかし、これは神のご計画です。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」イエス様は、ご自分が罪とされることを敢えて甘受されました。そしてバラバと同じように、罪を犯したはずの私たち

が無罪放免になるためであります。

ここに、「十字架につけるために引き渡した」とありますが、これはイエス様が十字架刑を執行するローマ兵らに引き渡されるということを意味します。これどもこれはまた、父なる神ご自身の御手に引き渡されると言ってもよいのです。このピラトの判決の手に、父なる神の御手が置かれているのです。私たちの中にも苦しみがあります。けれども、そこにも父なる神の御手があるということを知るとよいでしょう。

ところで、ここでピラトは誤算がありました。まさか群衆が、祭司長らによって煽られて、バラバを釈放せよというとは思っていなかったのです。そして、自分たちのユダヤ人の王であるはずのイエスを十字架につけよというとは思っていなかったのです。祭司長たちがどのように焚きつけたのかは分かりません。想像するに、ローマへの反感があるユダヤ人には、バラバはどんな暴行を働いていたとしても、英雄視することが可能だったのかもしれない。そして、イエスはそのような民族意識を高めるような肉の要素がありません。へりくだり、傷ついた葦をまっすぐにさせるような柔和な方でした。彼らのローマを憎む感情を満たてくれるような方ではありませんでした。それで、もしかしたら群衆は、バラバではなくイエスを十字架につけろと言ったのかもしれない。

ここに群衆としての罪があります。マルコの福音書には、群衆が驚いて、イエスについて行ったという言葉がたくさんあります。けれども、群衆はまた、このようにすぐにでも立場を変える危うさを持っています。集団心理と言ってもよいでしょう。ペテロが後に説教をした時に、「使徒 2:36 神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」と言いました。通りかかったような彼らも、イエスを十字架に付けたのだとペテロは、はっきりと言いました。何となく他の人たちがもしているから、ということで自分も行っていく。そして、自分が行ったという意識が薄い。こうしたことに対しても、主の前に申し開きしなければならないのです。

ところで、「イエスはむちで打ってから」とあります。福音書には、この一文だけで終わっていますが、みなさんがおそらくご存じのように、この鞭打ちは、とてつもなく残酷なものです。囚人から自白を引き出すためにローマが行っていたものです。背中が丸出しになるように、腰をかがめさせられました。そして、ガラスの破片や骨が埋め込まれた鞭を使いました。ですから、打たれると腫れるのではなく、肉が引きちぎられます。ここでとてつもない苦痛と失血のために途中で死んでしまうことさえあります。顔にむちが巻き付きますと、目が抉り出されたという記録さえあります。誰もが目を背けたい残酷な仕打ちに、何の意味があるのか？「50:6 打つ者に背中を任せ」「53:5 彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒された。」そうです、すべてが身代わりでした。私たちの罪に拠る傷が癒され、平安が与えられるために、この方は打ち傷を受けられたのです。

3B からかいを受けるイエス 16-20

16 兵士たちは、イエスを中庭に、すなわち、総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。17 そして、イエスに紫の衣を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、18 それから、「ユダヤ人の王様、万歳」と叫んで敬礼し始めた。19 また、葦の棒でイエスの頭をたたき、唾をかけ、ひざまずいて拝んだ。20 彼らはイエスをからかってから、紫の衣を脱がせて、元の衣を着せた。それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。

十字架刑が定められたので、それを執行する兵士たちにイエス様が引き渡されました。ユダヤ人の裁判において、死刑に定めた時にも、彼らは「14:65 イエスに唾をかけ、顔に目隠しをして拳で殴り、「当ててみろ」と言い始めた。また、下役たちはイエスを平手で打った。」とありました。ここでは、神の子キリストであるならば、言い当てて見ろというあざけりでした。宗教的な嘲りです。こちらは、ユダヤ人の王ということで、政治的な意味でローマ兵たちがからかっています。けれども、このような嘲りの中にも、真理があります。イエスは実に、ユダヤ人の王であり、ローマ人も誰もがひれ伏す、全ての人の主になられる方です。王であられる方が、このような嘲りを受け、苦しみを受けられたということなのですから、私たち人間にとっては衝撃なのです。

ところで、紫の衣は王の着る服を表しています。そして王冠をかぶらせていますが、茨の冠です。茨と言えば、私たちが思い出すのは、アダムが罪を犯した時に土地から生えてきた呪いの印です。「創世 3:18 大地は、あなたに対して茨をあざみを生えさせ・・・」イエス様は、ここで呪いを受けておられます。

兵士というのは、自分たちの裁量で何でもしてもよいという持ち分が与えられると、その力を制限なく使ってしまう傾向があります。兵士たちが悔い改めるために、どうすればよいですかとバプテスマのヨハネに尋ねた時に、「ルカ 3:14 だれからでも、金を力づくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」と言いました。それは、世界どこでも共通で軍隊が、してはいけないこと、行き過ぎたことをしてしまう事件が出てしまうのは常です。兵士にありがちな罪ですが、しかし私たちにもあります。自分に与えられた自由や権限を、行き過ぎて使ってしまう過ちです。こうやって見て行くと、それぞれの立場で罪を犯しています、宗教者の罪、政治家の罪、群衆の罪、そして兵士の罪です。全ての人が何らかの形でイエスを十字架に付けたのです。

2A 十字架刑の執行 21-41

1B 十字架への道 21-24

21 兵士たちは、通りかかったクレネ人シモンという人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。彼はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。

十字架刑は、見せしめの意味が強いです。ローマに住む者たちに、ローマに反逆するとこのようなことになることを見せつけて、同じ犯罪を犯さないように抑制するためのものです。そこで、十字

架刑を宣告された人は、自分が付けられる十字架の横木を自ら背負って運ばされます。町中を巡らされます。兵士四人が付いて、犯人の前に二人、犯人の後に二人が付きます。ところが、その囚人がむち打ちでかなり体力を消耗し、自分が付けられる十字架の横木を持つことが出来なくなる時があります。その時に兵士は、強制的にだれでもそれを運ぶように命じることができます。イエス様が、「マタ 5:41 あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。」と言われたのは、そういった法律があるためです。

「クレネ人シモンという人」という人が無理やり背負わされました。クレネは、今のリビア、北アフリカの地中海に面したところにある町です。過越の祭りを祝うためにやってきたのでしょう。興味深いのは、マルコは彼のことを「アレクサンドロとルフォスの父」として詳しく紹介していることです。ローマ 16 章に、パウロが「16:13 主にあって選ばれた人ルフォスによろしく。また彼と私の母によろしく。」と言っています。そうです、マルコは主に、ローマにいるキリスト者に対して書いていたことを思い出してください。アレクサンドロとルフォスは知られた人であり、その父がシモンだったのです。おそらくシモンは、このことをきっかけにしてキリスト者になり、シモンの一家が主を信じたのではないかと思われま

そして、イエス様が、「8:34 だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」と言われましたが、シモンがその第一号になっています。もちろんこれは、自分というものを捨てるという霊的なことでありますが、けれども、シモンの姿は私たちに、イエス様について行くことはどういうことかを端的に表しています。

22 彼らはイエスを、ゴルゴタという所(訳すと、どくろの場所)に連れて行った。23 彼らは、没薬を混ぜたぶどう酒を与えようとしたが、イエスはお受けにならなかった。

ゴルゴダは、アラム語で髑髏という意味です。ここは石切り場であり、大通りに面しています。十字架刑が多く執行されていたので、どくろの場所と呼ばれたのではないかとされています。今、聖墳墓教会と呼ばれる教会が建っているところが、そこではないかとされています。今は、旧市街の中にありますが、当時は城壁の外にありました。ヘブル 13 章 12 節には、罪のためのいけにえが宿営の外で焼かれなければいけないとされていますが、イエス様はエルサレムの城壁の外で罪のための供え物とされました。

イエス様に、「没薬を混ぜたぶどう酒」を与えようとしていますが、これは痛みを和らげるため、飲むと頭が朦朧となります。けれどもイエス様は拒まれました。どうしてか？ご自身が苦しみと痛みを受ける事こそが、使命であることを知っておられたからです。人の罪によってもたらされる苦しみと痛み、これを代わりに受けておられるのですから、その痛みを和らげてはいけません。

そして詩篇の著者は、このことを預言してこう言っています。「69:21 彼らは私の食べ物

りに毒を与え私が渴いたときには酔を飲ませました。」イエス様は捕えられる時に、「14:49しかし、こうなったのは聖書が成就するためなのです。」と言われましたが、十字架への道は、細部に至るまで、預言者たちが前もって語っていたことの成就なのです。

24 それから、彼らはイエスを十字架につけた。そして、くじを引いて、だれが何を取るかを決め、イエスの衣を分けた。

「十字架」という言葉を私たちはしばしば聞くので、その衝撃がなかなか分かりません。教会の建物の上に付いているもの、また、ネックレスにさえなっています。しかし、当時の人にとっては、実に惨たらしいもの、口にするにも忌避するものです。人々への見せしめのために極度に卑しめを受け、そしてその死は激痛が時間をかけて感じるようにさせ、また呼吸困難を徐々に行わせて、血液の循環が減ることによるショックが起こり、徐々に死に絶えていくようにさせます。ローマは、平和と秩序がありましたが、この十字架によって、人々を蹂躪する獣のような国であることを見せていました。

そして、「くじを引いて、だれが何を取るかを決め」という不思議な習慣があります。囚人は普通、全裸で十字架に付けられます。イエス様はユダヤ人だったので、もしかしたら急所のところには布が付けられていたかもしれません。ところで当時は布が貴重でした。それで囚人の布の売ることができるので、兵士たちは分け合います。ところが、イエス様の来ておられたのはワンピースになっていたのも、それをちぎったら売り物にならないので、くじを引いたのです。そしてこのことも、ダビデは詩篇で預言していました(22:18)。こんなことが、どうして約千年前に語られることができたのでしょうか？神は、この昔から、私たちが救われるために予めご計画を立てておられたのです。

2B 罪に定められたイエス 25-32

25 彼らがイエスを十字架につけたのは、午前九時であった。26 イエスの罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。27 彼らは、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右に、一人は左に、十字架につけた。そして 28 節は、「この人は不法な者たちとともに数えられた」とある聖書が実現したのである。とあります。

イエス様は、罪人共に数えられました。これこそが、神のご目的でした。この方が罪人に数えられて、それで私たちが義人と数えられるためでした。私たちが義と認められるために、義である方が罪とされたのです。ここに神の愛があります。ただ独り子を、神は私たちが罪と滅びから救うために、罪に定められたのです。

29 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おい、神殿を壊して三日で建てる人よ。30 十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」31 同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを嘲って言った。「他人は救ったが、自分は救え

ない。32 キリスト、イスラエルの王に、今、十字架から降りてもらおう。それを見たら信じよう。」また、一緒に十字架につけられていた者たちもイエスをののしった。

通りすがりの人たちも、祭司長や律法学者たちも、そして横に付けられている強盗までが、イエス様を罵っています。ここで彼らが使っている「救う」という言葉の意味合いが興味深いです。「十字架から降りてもらおう」と言っていますから、十字架から救われるということであり、彼らにとってのキリスト、救い主は、今の自分たちの苦しい状態から救われることを願って、救い主を待ち望んでいました。しかし、イエス様は心の中にある罪、神から私たちを引き離す罪から私たちを救うために、来られたのです。十字架から救われるために、ご自身の力を用いられませんでした。もちろん、それはできます。父なる神の力を全てイエス様は持っておられます。けれども、罪から私たちが救われるために、あえて十字架に付けられたままにされたのです。私たちは、状況からの救いを願いますが、真実の救いは、私たち自身からの救いと言ってよいでしょう。自分にある罪からの救いであり、罪から自由になることを、十字架はその力を与えてくれます。

3B 神から見捨てられたイエス 33-37

イエス様が十字架に付けられたのは午前 9 時です。そして死なれるのは午後 3 時になります。午前中の三時間は、人からの罵りを受けられました。そして後半の三時間は、神との時間です。神との時間とは、初めてイエスご自身が永遠の昔から、その懐に抱かれていた父から引き離される時間です。神の御怒りが、御子に注がれている時間です。それで次の現象が起こります。

33 さて、十二時になったとき、闇が全地をおおい、午後三時まで続いた。34 そして三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」訳すと「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

この時は、過越の祭りであり、満月の時の祭りです。ですから皆既日食の現象ではありません。ここでは神ご自身が、全人類の罪を御子の上に置かれている瞬間です。アモスが、この時を預言していました。「8:9-10 その日には、——【神】である主のことば——わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くする。あなたがたの祭りを喪に変え、あなたがたの歌をすべて哀歌に変える。すべての腰に粗布をまとわせ、頭を剃らせる。その時をひとり子を失ったときの喪のように、その終わりを苦渋の日のようにする。」

それゆえ、イエス様は、ご自身が見捨てられた呻きの言葉を語られています。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」であります。これはアラム語と言われています。これは詩篇 22 篇、ダビデが歌った詩篇の冒頭に出て来るものです。「詩 22:1-2 わが神わが神 どうして私をお見捨てになったのですか。私を救わず遠く離れておられるのですか。私のうめきのことばにもかかわらず。わが神 昼に私はあなたを呼びます。しかしあなたは答えてくださいません。夜にも私は黙っていられません。」午前 9 時から 12 時まで呼び求めました。そして真っ暗くなった正午からも黙ってはいま

せん、ということです。

罪があれば、神から引き離されます。死んで裁きを受け、永遠に神から引き離されます。しかし御子がここで、その引き離しをご経験されました。ですから、御子にあつて私たちは神に引き戻されるのです。そして神と永遠と共にいる天のエルサレムに入れるのです。

35 そばに立っていた人たちの何人かがこれを聞いて言った。「ほら、エリヤを呼んでいる。」36 すると一人が駆け寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒に付け、「待て。エリヤが降ろしに来るか見てみよう」と言って、イエスに飲ませようとした。37 しかし、イエスは大声をあげて、息を引き取られた。

イエス様の「エロイ」という言葉が、エリに聞こえたのでしょう。当時、ユダヤ人は義人が助けを求める時に、死なずに天に引き上げられたエリヤが戻って来てくれて助ける、と信じていました。それで、エリヤが来て降ろしてくれるか見てみよう、としたのです。しかし、エリヤは助けませんでした。彼らは再び、痛みを和らげる作用のある酸いぶどう酒をイエスに差し出しています。「葦の棒」とありますが、当時、棒につけた海綿と言えば、ローマの貴族はトイレのお尻拭きに使っていました。ですから、相当の卑しめをイエス様は受けておられます。

主は、本質的には殺されませんでした。「イエスは大声をあげて、息を引き取られた。」とあるとおり、ご自身で息を引き取られたのです。主はこう言われました、「ヨハ 10:18 だれも、わたしからのちを取りません。わたしが自分からのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、再び得る権威があります。」私がイエス様を公に信仰告白しようと思ったのは、このことについての理解でした。イエス様が否応なしに十字架に付けられたのではない。ご自身で自ら進んで、喜んで十字架にかかってくださり、死んでくださった。ここに愛があります。イエス様が死なれたのは、私をみなさんを愛するためであり、自ら進んで死んでくださったのです。

4B 死なれた後の徴 38-41

そして死なれた後の現象をもってクライマックスを迎えます。

38 すると、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

キリストの死は、聖なる神の御座との間にある仕切りが取り除かれたことです。契約の箱が安置されている至聖所に、神が住まわれます。そこは神の御座を示しており、最も聖なるところであり、大祭司が年に一度、血を携えて入らなければ入ることのできないところです。そこに命じられていないのに入ろうとすれば、かつてのアロンの息子がそうであったように、たちまち滅ぼされてしまいます。しかし今、それが上から引き裂かれました。つまり、神ご自身が引き裂いてくださったのです。聖なる方、神が、キリストの肉体がいわば垂れ幕となって、私たちにまで近づいてくださいました。

こうやって天と地がつながりました。キリストにあってつながりました。「ヘブ 10:19-20 こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。」

39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て言った。「この方は本当に神の子であった。」

この百人隊長の言葉が、今日読んだ 15 章の、いや、マルコの福音書全体のクライマックスと言ってよいでしょう。「この方は本当に神の子であった。」であります。驚くべき信仰告白です。マルコによる福音書の始まりは何でしたか？「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ」です。ローマの百人隊長は、これまで何度も十字架刑の現場にいたことでしょう。そこで死んでいく人々の姿を見て来たことでしょう。けれども、イエス様が息を引き取られた時、彼はそこに全く異なるものを見ました。このように死なれたところに、彼は神の子であることを知ったのです。宗教指導者は、十字架から降りてこいと言いました。弟子たちも躓きました。なんとユダヤ人ではない異邦人の、十字架刑をいつも見ている百人隊長が、その死に神の子の証しを見たのです。

イエス様は、悪霊を追い出された時に、悪霊どもから神の子だと言われて、厳しく口外しないように命じられました。悪霊を追い出したり、人々を癒したり、水の上を歩かれたりして、そこに確かに神の子としての全能の力が現れています。けれども、その死において、身代わりの死において、神の子の栄光が現れているのです。

40 女たちも遠くから見ているが、その中には、マグダラのマリアと、小ヤコブとヨセの母マリアと、サロメがいた。41 イエスがガリラヤにおられたときに、イエスに従って仕えていた人たちであった。このほかにも、イエスと一緒にエルサレムに上って来た女たちがたくさんいた。

実はこれだけ多くの女性たちが、イエス様について行っていました。「遠くから見ている」とあるように、詩篇の預言にあるように、主は、「38:11 近親の者でさえ、遠く離れて立っています。」とあるとおりで。しかし、弟子たちはどこにいったのか分からなくなっているところで、遠くからでも眺めているということは勇気ある行動です。これまで、弟子たちとイエス様との仲をずっと福音書は辿ってきましたが、彼らがいなくなった今、思いもよらない人々が、最も大事な時に登場します。始まりが、ローマの百人隊長でした。次に、これだけ大勢の、イエス様の一行に仕えていた女たちです。

私たちも同じように、この方の死にある神の御子としての栄光を見ましょう。